

発行所
真宗大谷派勝善寺
〒299-2214
千葉県南房総市二部1344
電話 0470-57-2657
FAX 0470-57-2290
メール info@syozenji.or.jp
HP http://syozenji.or.jp/
住職井上孝昌(釋孝昌)

法語
追善供養ではなく、
聞法供養。
これが真宗仏事の
精神です。



今年の盂蘭盆会

盂蘭盆法要

日時
8月10日(土)
10時〜11時30分

内容
お勤めと法話
法話 副住職

◎護持金は、本堂で納めてください。



向かって右余間

真宗大谷派では、お盆の時期にこの切籠灯籠を吊ります。「房州切籠」ではありません。この形は、頭に血を上らせてイライラとして生きている私たちの姿を表しているのだそうです。あなた様は、心穏やかに過ごされていらっしゃるでしょうか？



奉仕作業

6月23日(日)

本堂・庫裏のガラス拭き、参道・馬場赤道・鐘突き堂・山斜面・第二墓地奥などの草刈り、彼岸花球根を聖人橋駐車場に植樹を総勢37名で2時間ほどの作業しました。お疲れ様でした。有り難いございます。

- List of names and titles of participants in the maintenance work, including names like 吉本行男, 吉田誠一, 吉田晋一, etc.

題字下の法語は、池田勇諦先生のお言葉です。
先生には、「教行信証に学ぶ」という東京練馬の真宗会館で行われた研修会で2007年から2014年にかけてご教授をいただきました。
2007年は、ちょうど私が教員を退職した年でした。僧侶の資格はすでに取得していたものの真宗の教えに疎くこれをハッキリさせたい思いがあり、周りにはさぞ迷惑をかけていたことでしょうか、合計27回すべてに参加することができました。
もちろん先生のご化導があったからこそですが、共に聴聞した仲間にも支えられました。今もそのご縁が、私の聞法生活の原動力になっています。
聞法供養が、真宗の仏事の精神だと。
「聞法供養」、これは聞き慣れない言葉ですね。
「追善供養」は、死者のためにお経をあげたりお供物をあげたりすることで死者の幸せ祈ることです。しかし、それはよく考えれば解ることですが、自分が満足しているだけに過ぎない。

日頃、年回法要をお勤めしていると、この追善供養が仏教だと思っ過ぎて過ごしている人が実に多いと感じさせられます。
先生は、追善供養は「仏事では無い。仏教の皮をかぶった習俗だ」と仰います。
この言葉に私は、今まで漠然と感じていたご門徒と私の間にある感覚のズレの原因に、ハッと気が付きました。
では「聞法供養」は、どのような仏事なのか？
亡き人を縁として、私達が聞法する仏事です。
儀式によりつくられる非日常的な雰囲気の中で、各々が亡き人の人生に向き合い、無量のご縁に生かされてある自己であったと驚く。自己を支えていたその大地に気づいたら、ご縁となつた亡き人に感謝しないわけがありませんよね。
先生は、「聞法供養によってのみ、亡き人と私が共にすくわれる」と仰います。
ここが真宗仏事の魅力です。
勝善寺が執行する仏事は、すべて聞法供養です。

新たに三人の推進員が誕生
三月に東京練馬の真宗会館で二泊三日、五月に京都東本願寺で二泊三日の研修を受け、写真右から黒川敦子(釋尼浄香)、渡邊秀子(釋尼独秀)、正木道雄(釋道明)のご三方が推進員となりました。



御真影(親鸞聖人)の前に講師 牧野豊丸先生と共に

宣誓

私達は、帰敬式を受式し、法名と名告り、「人間として歩む」という課題を頂きました。
一日々の生活の中で、お念仏やお勤めを欠かさない様にします。
一月に一度は聞法の場に身を運び共に教えを確かめます。
一報恩講にお参りします。

二〇一九年五月二〇日
東京教区推進員教習
修了者一同

予定くだけ

- Calendar of events including dates and times for activities like 月曜日6時15分、お勤め練習、8月10日10時、盂蘭盆会、9月23日10時、秋彼岸会、10月2日13時、親鸞教室、10月10日13時30分、役員会、10月13日14時、同朋の会、10月20日13時30分、世話人総会、10月13日13時30分、仏具御磨き、10月15日13時30分、準備、10月15日13時30分、報恩講速夜、10月16日6時30分、報恩講晨朝、10月16日10時30分、報恩講日中、10月6日13時、親鸞教室、10月8日14時、回勝善寺聞法会、12月11日13時、婦人研修会、12月31日23時45分、除夜の鐘、1月2日10時、修正会

※・以外は当寺が会場です。

親鸞聖人御作

是非しらず邪正もわかぬ
このみなり
小慈小悲もなければも
名利に人師をこのむなり

「正像末和讃」より

第二回勝善寺聞法会(六月二日)での副住職井上泰之の法話の冒頭部分です。やがては当寺の住職となる自身の歩み。

あられためまして今日は。先ほど、住職の挨拶を聞きまして、茨城や横浜、千葉、船橋の遠くから、そして南房総からお集まりいただきました。ありがとうございます。私も遠くから来た一人でありまして、昨日京都から参りました。

皆さまが、どのような思いで、今日この寺にお集まりいただいたのか、私にはよくわかりません。それぞれ内に秘められたものがあると思います。住職に言われて義務感からか、周りの人に誘われたとか、どのような因縁によるのか、私にはわかりません。ただ、それぞれのところで聞きただければと思います。

ところで、どう見てもこの中で一番若いのは私です。私は今二十八歳です。四捨五入しても三十歳です。私以外でいえば、お若い方で六十歳代のよう

よかったのに」と思いましたが、姉は「弟が継ぐに決まっている」と思っていますので、何か見えない「後継ぎ」という縄に縛られていました。私に生まれた時から将来を選ぶような自由はないと思っていました。周囲からも「将来、住職になるのでしよう」と言われ、今思えば大切にお育ていただいていたのですが、全てが嫌々でした。

百八十度の方向転換

これは不思議なことですが、水島先生のところまで聴聞を続ける中で、「そうか!」と自分の中から湧いてくるものがありました。それは「自分が思っていたのは仏教ではなかった!」ということ。父や祖父の姿を幼いながらに見ていた私にとって、葬儀するのが仏教であり、周りから「あんたたち(坊主)は、人が死んで儲けているんだぞ」と聞かされたことがあります。だから、葬式をして金儲けをするのは嫌だなど、小さい頃から思っていました。その仏教は葬式だと思っていたものが、水島先生のお話を聞く中で百八十度変わったのです。「そうではない。そもそも仏教は葬式ではないのだ」と感じたのです。私たちは日頃、仏教の「ぶ」の字さえも考えずに生きています。けれども、よくよく私が今

に思います。そうしますと、三十歳以上の年齢の差がある私がお話をさせていただく。これは厚かましいことのように思うのです。人生経験ということでは、皆さまが大先輩です。その方々に若造が何を喋ることがあるのか、と思う方もいるはず。しかし、ここは仏法の場合です。人生経験の如何にかかわらず、一つ仏法、聴聞についてお話しさせていただこうと思います。人生経験が多いとか少ないとか、有るとか無いとかは世間のことに過ぎないのです。

自己紹介

初めての方もおられますので、まず私自身のことを少しお話しさせていただきます。ちょうど十年前の四月、私は京都にある真宗大谷派の大学である大谷大学の歴史学科に入学しました。

ご存知の方もおられると思いますが、この寺の住職も先代住職も教員をしていました。その影響が少なからずあって、将来この寺の住職になるまで学校の教員になろうと当時の私は漠然と思っていました。ただ、勉強は出来のいいほうではありませんでした。歴史に興味がありましたので、社会科学の教員になろうと思いきや歴史学科に進学した

ここにいることを見たら、その一挙手一投足が仏教の範疇でないものはないのです。そのことがわかって以来、私にとって仏教は「聞かざるを得ない」ものになりました。

仏法を聴聞すること

皆さまが、何故ここにお集まりになったのか。それは仏教を聞かざるを得ないと思いませんか。これは正解です。寺の聞法会や千葉組の活動(親鸞教室や婦人研修会など)、余所のお寺に向か

て聞法されている方もいると思います。仏法を聴聞して「本当のこと」を知る。まずここから出発する。もう少し言えば、本当のことが知りたいという思いが起こって、がむしやりに聴聞する。ここが大事なこと。そして、どんなことからでも仏法を聴聞できる身にまで育てられる。ここまで行かないとダメです。そうでないと、結局空っぽ感が起こります。私はそのように聞いています。

親鸞聖人の時代に寺はありませんでした。寺の本堂のような儀式を行う堅苦しいところではなく、教を聞くということではなく、親鸞聖人は生活を共にする家族やその土地の人々、あるいは聖人を招いた方々のところへ赴き、仏教が即生活であることを語る

のです。そうすれば、社会科学の教員資格だけでなく、所定の科目を履修すれば真宗大谷派の住職になる資格も大谷大学では取得できるのです。

しかし、四年間の学びが終わりに近づいた頃、「このまま寺に帰ってもいいのだろうか。何も仏教をわかってない」という問題が私自身の中に起こったのです。浄土真宗や仏教のことは多少なりとも学部の人に勉強したつもりでしたが、「仏教がわからん。このままではまずい」と思ったのです。

そのきっかけとなったのが、三年生の時に水島見一先生の勉強会に出た時です。先生には四回ほど、この寺でもご法話していただきました。迷っていた私に水島先生は、「おまえ、大学院に来ないか」と声をかけていた

だき、そこで両親に相談して大学院へ進学する決断をしました。勉強が嫌いな私が大学院を目指すのから、可笑しな話なんです。大学院の修士課程に進学しましたが、あつという間に二年が経ち、それでも物足りないという思いでした。そこでさらに博士課程に進学し、水島先生のもとで聴聞を続けました。そして、これも水島先生の因縁ですが、一昨年の四月から大谷派の系列校である光華女子高校

れたのだと思います。それは背筋をピンと伸ばして聞くというよりも、親鸞聖人自身が生活を通して知らされた「自分のだらしなさ」というか、「どうしようもならない自分」を曝け出したところに本当の自分と打ち解けられる、共感の世界のお話であったと思います。それが仏法に照らされる、ということではないでしょうか。

私の仏法聴聞の場

私が働いている老人福祉施設には、認知症が進んで自分では喋れない人、自分では排泄もできず、食することも歩くこともできない人など、様々な方がいます。

その人たちを見てみると、「この人にとって満足とは何だろうか?」と考えざるを得ません。あるいは同僚に対して、「この人は何を思っているのか?」と疑問を抱く。これは、どの様な思いがあるのだろうか?と私は考えるのです。見た目ではわからない、表面には現れない何かがあるのです。これは皆さまにも共通していることではないかと思えます。

あなたのためと思いがながら、一挙手一投足に「魂胆」がある。人には見えず、自分でも気づかない「魂胆」です。その辺りが私は非常に気になるのです。関

で宗教科の非常勤講師を一年間しました。昨年の春には、博士課程を退学し、非常勤講師の職も辞しました。

その後、色々な因縁があつて、今は京都の清水寺に係る老人福祉施設でショートステイ(短期入所)を担当する生活相談員として働いています。皆さまの中には、お身内の方で要介護認定を受けて、デイサービスやショートステイ、あるいは特別養護老人ホームを利用されている方もおられると思います。私は相談員です。利用者家族や他事業所、役所とのやり取り、利用者のケアに対する評価を主な仕事内容とするため、直接介護に携わることはありませんが、生老病死を目の当たりにする現場で働きはじめて二年目になります。

寺の跡継ぎとしての自分

この寺は、「私の寺」というわけではありませんが、私が生まれ育った寺です。今は住職が健在です。何年後になるかわかりませんが、やがて後継ぎがなければなりません。

昔は全てが義務でした。得度するの、大谷大学に行くのも嫌々です。何か自分の中に嫌気持ちは払拭できるような言い訳をつくっていました。「寺なんか継ぎたくない」「次男だったら

わりのある人たちの姿から、その「魂胆」が気になるのですが、自分にその思いが向くのです。「魂胆」は誰にでもあります。それに気づかなければ、「魂胆」に振り回されるといことがありません。それは「自分の思い」というものかもしれませんが、それが返って世界を狭くしているのです。常に「魂胆」をつくり、自分で自分を狭くする。その自分から解放せしめるはたらくに出遇っていきたく私は思っています。

